



話し、懇親会では被災地の子どもたち約50人とともに、中国式のギョーザを作った。

0日には男女合わせて402人、55歳には94人が出場した。写真上。

100歳の男子は釧路町

遊し雨か降ったほか、二ッ付近にクマ出没の情報もあったが、ランナーは、オホーツク海沿いや酪農地

災の影響が心配されたが、両部門のエントリーは、東京や沖縄なども含め557

1分44秒で、一般女子は釧路市の浅沼志保さんが1時間20分33秒で優勝した。

局地的に強い雨を降らせる本州並みの降雨パターンが、北海道でも暑い夏に見られるようになってきた。北大の山田朋人准教授(水工学・水文気象学)が過去21年間の気象データを解析し、明らかにした。

「線状降水帯」昨年21回

昨夏の道内は、台風によらない豪雨、短時間の局地的な強い雨が相次いだ。札幌管区気象台によると、道内225観測所のうち34地点で1時間雨量の最大値を記録し、年別では最多となっている。

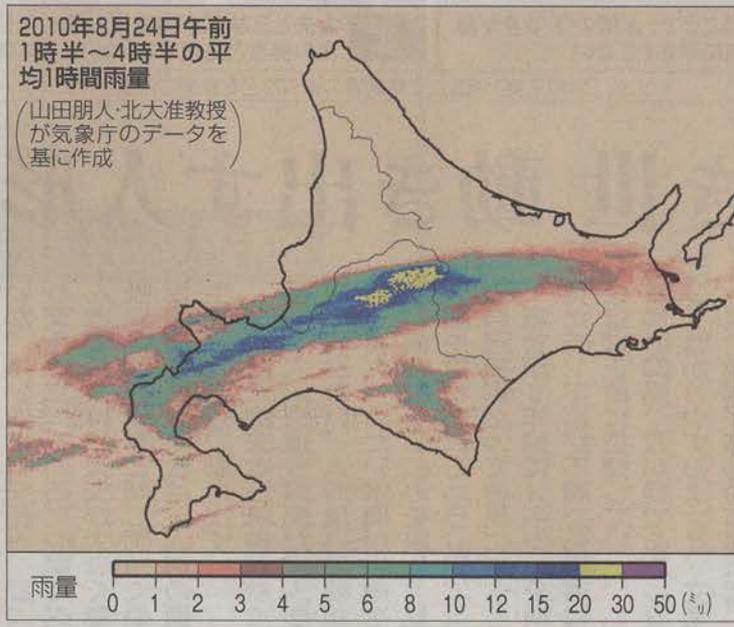
豪雨災害の例はあまり報告がない(山田さん)というが、本州以南ではたびたび災害を引き起こしてきた。

記録的猛暑で多発

山田さんは、線状降水帯を「1時間20ミ以上の強雨域を持ち、線状に伸びる降水帯」「消失まで2時間以上」などと定義。1990年以降の6、8月について気象庁の降雨レーダーを解析した。その結果、昨夏の

道内では線状降水帯が21回発生し、過去21年で最多だったことが分かった。8月24日に東川町の道道が被災した時も、線状降水帯が発生していた。図。

そのほかの年では、多くが発生回数は10回未満だったが、なぜ昨夏は飛び抜けて多かったのか。記録的な猛暑だった昨夏は、日本海の海水温が平年より3度近く高く、太平洋高気圧が北に張り出して北海道の西から湿った空気が大量に入り



局地的な雨北の夏も

やすかったためだという。発生がゼロだった93年は冷夏。海水温も低く、水蒸気の供給量も極めて少なかった。「発生条件として暑さ

が特に重要」という。線状降水帯は日本海側の発生が多く、9割以上が北東か東方向に伸びる特徴を持つことも分かった。流域の狭い中小河川では、降水帯が同じ位置にとどまり続けられ、一気に洪水の危険性が高まる。

突発的な水害懸念

道内の水害といえば、81

(昭和56)年8月上旬に石狩川流域で氾濫が相次ぎ、8人が死亡したといわれる「56水害」や、日高・十勝地方で死者・行方不明者が11人に上った2003年8月の集中豪雨がある。

いずれも北海道付近に前線が停滞し、南から台風が湿った空気を運んで大雨となった。4日間の総雨量が400ミに達した地点もある。札幌管区気象台の四宮茂晴・主任予報官は「前線と台風の合わせ技は、道内で最も注意すべき大雨のパターン」と説明する。

山田さんは、こうした56水害型に加えて、線状降水帯による豪雨への備えが必要としている。56水害型と異なり、狭い範囲での突発的な災害も懸念される。「レーダーを見て『線状』かどうかを意識して行動するなど、行政、個人の情報収集力、判断力も重要になってくる」

研究成果は30日に京都府で開幕する水文・水資源学会で発表する。

道内 11.51
白 7.21
病院(豊 1.51
北海道
「札幌」翌朝、記念病院
署では
ンクリ
が投げ
ス6枚